

《資料》

昭和期・解散前の三井物産

——津下統一郎氏との対談——

安 岡 重 明

は し が き

- I 名古屋支店勤務
- II ニューヨーク支店へ転勤
- III 本店営業部肥料第二掛へ配属
- IV 戦争末期と敗戦直後

は し が き

私は三井家・三井財閥の研究のかたわら、三井家の人々や三井系企業の方々の回顧談をうかがう作業を続けてきた。記録に残らない諸事実を、いまのうちにできるだけ集めておくためである。そうした方々として、三井八郎右衛門高公氏、三井礼子氏、三井高昶氏、三井高遂氏、三井高寔氏、江戸英雄氏、上野直蔵氏があった。

1982年11月、東京銀座のヤマハホールで行われた同志社主催の講演会のあとの会席において津下統一郎氏と同席し、同氏が三井物産にお勤めであったことを知った。その後、同氏の御来学の機会に三井物産の思い出を話して下さるようお願いしたところ、心よく御同意いただいた。

そこで、下記の質問書を同氏にお届けして、1985年3月23日夕方、学校法人同志社評議員会終了後、ご対談いただいた。朝からの会議の連続でお疲れのところ、そのような様子は少しも見せられず、長時間にわたってお話し下さった。またのちには、対談記録にも目を通して添削していただいた。ご尽力にあつく御礼申し上げます。なお当日、同志社大学助教授石川健次郎氏、同志社大学経済学部および大谷女子短期大学非

常勤講師の千本暁子氏が同席された。テーブルおこしは石川氏の手をわずらわした。

質問事項

1. 三井物産御入社事情（大正15年）
2. ニューヨーク支店へのご転勤（昭和5年）
3. 同店でのお仕事（昭和5～12年）
4. 帰国後のお仕事とご退職（昭和12～21年）
5. ニューヨーク滞在中の三井家の人々とはのご交際
6. 団琢磨暗殺のときの衝撃（昭和7年3月）
7. 日中事変のときの様子（昭和6年～12年）
7. 大太平洋戦争の三井物産の営業活動
9. 三井合名と三井物産の合併（昭和15年）と再分離（昭和19年3月）
10. 現地法人の場合（フランス大正12年、ドイツ大正15年）と支店の場合の事情のちがいがい。

津下統一郎氏略歴

明治36年8月21日生れ。大正15年同志社大学法学部卒業。三井物産株式会社入社。昭和21年9月同社退社。昭和21年7月匿名組合東京紙器製作所創立。22年4月株式会社東京紙器製作所常務就任、24年4月同社代表取締役社長。31年8月千代田紙業株式会社と合併、取締役紙器部長。35年7月株式会社富岡光学機械製造所代表取締役副社長。36年9月千代田紙業取締役辞任。40年2月富岡光学株式会社代表取締役社長。53年6月富岡光学退社。

この間、日本アメリカン自動車株式会社、大沢商会取締役、監査役、顧問、富士海外旅行株式会社、株式会社マミヤ監査役を歴任。

現在、社会福祉法人日本キリスト教奉仕団理事長、学校法人同志社評議員・理事、玉川学園評議員・理事。

I 名古屋支店勤務

間 同志社大学をお出になりにまして、三井物産に、大正15年にお入りになっておられますが、その時のご事情からお聞かせいただきたいと思っております。

答 同志社におりました時から、外国に行ってみたく思っていたのですが、当時三井物産の常務をしておられました小林正直さん(同志社の出身者なんですが、私の父と同年輩の方でして、私の父と共に同志社の理事をされておまして、非常に親しくしていただいております。)の紹介で三井物産に入りました。大正15年といえますと、ご承知のとおり景気のいい時ではありませんでしたから、中々就職はむづかしかったんですけども、そういうご紹介で三井物産に入りました。最初、名古屋支店へ配属されました。その時長崎高商の者が一人、名古屋高商卒が一人、普通商業学校卒が二人とそれに私の五人の新入社員が名古屋に入りました。そして勘定掛へ配属され、その後昭和5年まで名古屋におりました。

問 名古屋支店というのは、かなり地方産業に資金融通をして、援助したと聞いておりますが。

答 その通りです。いろいろ細かい仕事をやっておりました。漬物まで扱っておりました。

問 あとでそれがまた中小企業を絞るんだというような悪い方に宣伝されたりしたようですね。

答 そうです。新入社員は普通の勤務のほかに、宿直が電信番をしなければならず、私は電信番を選びました。当時は情報システムが今日のようにないから、海外からの取引については電報なんです。それも全部暗号でやりますので、暗号の書類が非常に沢山あるんです。それも各部によって違っていて、三井独特の暗号書が沢山ありました。それで勤務時間が終りましてから、外国や内地からの電報はみんな暗号できますから、それを解読するために残業するのです。

なおこれと関係のないことですが、当時私送便というのがありまして、毎日、東京・神戸間の支店所在地駅で書類を受け渡しするのです。そのため宿直の社員は夜中に名古屋駅まで行っておりました。

問 支店でも外国との取引を直接していたのでしょうか。

答 ええ、直接しておりました。

II ニューヨーク支店へ転勤

問 その後5年ばかりで、ニューヨークに転勤されるわけですが、これはその当時としては楽転ということでしょうか。

答 まあそういうことでしょうか。当時のご承知のとおり、飛行機のない時代ですから、横浜から船に乗って、約二週間かかってサンフランシスコに着き、それから4日間くらいかかって列車でニューヨークへ行きました。転勤の旅というのは楽しいものでした。

問 ニューヨークでのお仕事はどのようなものだったのでしょうか。

答 ニューヨークに行きました時は、こちらで勘定掛におりましたから、やはり勘定掛に配属されました。約一年くらい勘定掛におりました。L. C. (レター・オブ・クレジット＝信用状) などの担当をしました。その後、麻・護謨掛というところに行きました。麻と生ゴムを扱っておりました。麻はインドから、生ゴムはシンガポールやマレーシャなどから輸入するわけです。生ゴムはグッドイヤーだとかグッドリッチだとか大きな会社へ売るわけです。当時三井物産はゴム業界でも最大手だったでしょう。ゴム取引は、ご承知のとおり相場物ですから、現物の売買をすると同時に取引所にヘッジするわけです。だから私どもの目の前にはブローカーとの間の電話が15～6本ありまして、それを通じて売った買ったとやるのです。そういう仕事をずっとやっておりました。麻・護謨掛といいますが麻の方の仕事はほとんどやりませんでした。

問 その後、7年間ばかりニューヨークにご滞在だったわけですが、その他のお仕事は。

答 ずっと、生ゴムをやっておりました。まだ若い時でしたから、最初は現場の仕事もさせられました。輸送はそのほとんどが日本船で、三井ラインとか国際汽船とかだったのですが、それがパナマ経由でニューヨークの波止場に着きますと、われわれ若い者は検品に行かされるのです。寒いニューヨークの冬に、仲仕達と一緒に働くわけです。ゴムがベニヤの箱に入ってきてまして、全荷物の一割くらい検品するのですが、ご承知のとおり生ゴムはシートになっていますから、そのシートをナイフで切り取りまして、目で検品するのです。というのは、Rubber Trade Association とか Rubber Manufacturer Association などに規格があるわけですが、それは現物でサンプルが

できています。科学的に分析するのではなく、目で見て、基準見本と比較してゴミがどれくらいあるとか、カビが生えているとかいうことで仕分けするのです。たとえば一級品、Rubber Trade No. 1として輸入した場合、それが規格にあっているかどうか検品するのです。買い方の人間も一緒に検品するのですが、両者の間で意見の相違が起きることが多いのです。仲裁する裁定機関がありまして、話が合わないとそこへ持って行って裁定してもらおうという、誠にプリミティブな方法で検査していたものです。

答 等級分けは全てやるのですか。

答 いえ、大体は産地でやってきます。これも慣れませんとなかなか難しい仕事でした。昭和12年に帰国するまで麻・護謨掛におりました。

問 ニューヨーク支店では、商品をアメリカへ輸入して、それから日本へ売ったのですか。

答 関係はなかったです。いわゆる第三国貿易というものです。麻もそうでした。インドから輸入して、アメリカで販売するのです。

問 そのニューヨークでお勤めの時に、三井家の方々も一緒だったとか……。

答 ええ、永坂町家の三井高篤さんご夫妻が子供さん一人つれて、ニューヨークへ来られてました。

問 その時三井さんのポストほどのようなものでしたか。

答 庶務関係ではなかったかと思います。まだお若い時でしたから。私はニューヨーク郊外に住んでおまして、三井さんは市内に住んでおられました。二、三度食事と呼ばれたことがあっただけで、そう親しくはお付き合いいただかなかったのですが……。

問 津下さんの奥様の方が親しくされていたとお聞きしたのですが。

答 ええ、三井さんの奥さんの方とはお付き合いいただいたようです。婦人連中が集るところへ一緒に行ったようです。

問 その時の高篤さんの奥さんが三井礼子さんですね。

答 そうでしょう。MRA (Maral Rearmament) の集会に二、三度行ったことがあります。三井高篤さんがお嬢さんと来ておられました。そのころからじゃないでしょうか。あんなったのは。

問 いまでも三井家の方々でそれを熱心にやっておられる方がいらっしやると聞きますが。

答 そうですね。

問 津下さんはその頃にはご結婚なさっておられますね。

答 ええ、私は結婚しております、子供をつれていったのです。私のニューヨーク転勤が決まりましたあと、家内が病気になるまで、先に私が単身で赴任しまして、一ヶ月おくれて家内が子供を連れてやってきました。その時ちょうど石田礼助さんが支店長として赴任される時で、私の家内がご一緒させていただいたんです。三井物産では、給料が一定額にならないと、海外での家族手当がつかないんです。当時の月給で150円に達したら家族手当がついたのです。

問 高給であれば、つくわけですか。

答 ええ、それで150円になると、手当がつくのです。私は手当のつく前に自費で行ったんです。笑い話になりますが、昇給の具合で、149円で止められ、手当が1年延びたことがありますよ。ところが家族手当が付いたとたん、今までの旅費とかいろいろな費用を一度に呉れました。

問 そのような月給をお取りになっておられて、あちらでのご生活は……。

答 当時は手当だけで暮しておりました。日本で貰う円の月給は、本店の特別預金にしてあるんです。そのほかに、1日出勤すると、100円につき1銭3厘の出勤手当がつくのです。それが普通のボーナス以外に半期にたまったのを呉れるのです。ですから円の給料と1銭3厘は本店の特別預金にたまっておりまして、むこうでは海外手当だけで暮しておりました。

問 それは三井の社員として恥かしくない適当な手当なんでしょうね。

答 そうです。ですから妻子手当がつきますと、とたんに豊かになりました。最近はどうか知らんが、当時は三井の社員として恥しくないように、旅行でもなんでも金で一等でした。私の入社時の給料は、本給が45円でした。帝大出が5円高かったです。その他に手当がちょっとついて、70円くらい貰っておったでしょうか。

問 ニューヨーク滞在手当はドルで受け取られたのですね。

答 ええ、独身時代の時は200ドルぐらいだったですかね。それで妻子手当がついたとたん400～500ドル位になったと思います。豊かになりましたよ。車も買えますしね。

問 その滞在手当というのは、アメリカ人の月給取りと比べても遜色のないものだったということでしょうか。

答 ええ、それどころか、非常に豊かでした。

問 そうすると忙しい日はされたが、なかなか快適だったということでしょうか。

答 その通りです。しかし物価が上ってきまして、ある時などは、給料を上げて呉れという話があると、サンフランシスコなどのウエスト・コーストはニューヨークなどのイースト・コーストより給料が安いので、サンフランシスコは上げて、ニューヨークは上げないというようなことがありました。

問 やはり、西海岸の方はまだ開けてないということで生活費も安かったのでしょうか。

答 そういうことです。

問 ちょうどニューヨークにいらっしゃったところに、団琢磨さんの暗殺事件(1932年3月)がありました。それについての衝撃などは……。

答 私は衝撃はあまり受けませんでした。外国におりました関係で、そのようなものは受けませんでした。

問 ニューヨークにいらっしゃった頃に、日中戦争が起きたようですが……。

答 支那事変のころは、ニューヨークにおりました。なかなか毎日毎日新聞に書かされてられました。私は汽車に乗ってニューヨークから20マイルほど離れたママロネックというところから通っておりましたので、毎日同じ人と会うわけです。始った時は日本優勢でしたから、知らない人が「お前日本人か支那人か」と聞きまして、「日本人だ」というと、「そうか、えらいなあ日本人は」というようなことをいまして、感心しておりました。満州事変の頃は排日的な雰囲気はなかったです。ただ当時、日支事変が始まりますと、日本も中国もさかんに宣伝しておりました。ニューヨークでも両国ともラジオの時間を買いまして、さかんに放送しました。コロンビア大の赤城さんという教授がおられまして(奥さんは安部磯雄さんの娘さんでした)、さかんに活躍されておりました。私は子供をアメリカの学校に入れておりましたが、日本とちがいで、時々父兄が集まりますとディスカッションをやるわけです。日本人はディスカッションの題材にたびたび日支事変をとりあげるのです。その時に一度赤城先生に来ていただいて、話していただいたことがありました。当時「ジャパン・スピークス」というのと「チャイナ・スピークス」という本が出ました。両国ともマスコミや出版物を通じて、自分の主張をしたのです。その本は玉川学園に寄付いたしました。(玉川学園の創立者小原国芳先生と父が非常に親しくしておりましたので。今でも私は玉川学

園の理事をしております。)

問 津下さんご自身は小学校を出られて、同志社へこられたのですか。

答 私は小学校の大部分は新潟県の長岡でした。初めと終りは東京でしたが……。中学は東京でして京華中学でした。そして同志社の予科に入りました。

問 やはりお父さんのおすすめで……。

答 ええ、同志社へいったらどうだということ……。6年間寮生活をしました。

〔付記〕対談の原稿に手を入れて頂いたとき、津下夫人は次の回想記を寄せられた。興味深い話であるから紹介しておきたい。昭和21年の占領軍の突然の三井物産・三菱商事の解散命令は、両社の活動力を恐れたためだとする説があるが、三井物産の勢威を示すエピソードは示唆的である。

「主人が紐育（ニューヨーク）に赴任いたしました時、私は流感にかゝつておりまして、一、二ヶ月後に二才の男の子を連れまして、紐育支店長に就任されます石田礼助氏御夫妻の御伴をして紐育に参りました。シアトルから乗ったのは多分ノザン・パンフィックという鉄道会社の汽車だと思いますが、第一日目の夕飯に四人が食堂へ参りますと、食堂車が万国旗で飾られ、私共のテーブルには実に立派な御花が生けられておりました。コンダクターが石田様に御挨拶に来まして、この鉄道を利用された御礼を述べたあと、次の様な意味のことを云いました。『三井物産は私共の鉄道会社の一番大きい御得意様です。あなたが紐育の支店長に来られても、是非今迄通りこの鉄道を貨物の輸送に御使い下さい。今夜の食事は私共の会社の御招待です。御好きなものを何でも沢山召上って下さい。』私が三井物産の勢力の大きさにびっくりしたことを今でも、はっきり覚えております。」

Ⅲ 本店営業部肥料第二掛へ配属

問 御帰国は支那事変との関係ですか。

答 いいえ、私の父が亡くなったものですから、急に帰ってきました。そして本店の肥料掛へ配属されました。私は特に外国に居た関係で、主にカリ肥料を担当しました。これはフランスとドイツと合同でカリ肥料を日本に売っていたんですが、フランス人やドイツ人の代表が日本にいまして、それを相手にしておりました。結構高売になりましたよ。そういう肥料の仕事を約一年ばかりやりました。当時は本店営業部肥

料第二掛というおりました。その後営業部が物資部となり、私はその肥料第二掛の次席になりました。当時の部長は今井富之助さんでして、これは大変立派な方でした。第一掛の次席には現三井物産の相談役の水上達三さんがいまして、大変仲良くしたものです。そのあと営業部に紙掛が新設され、そこに配属になりました。戦争中に掛が課になりました。といいますのは、対外的な交渉をする際に、役人さんなどは皆課長相手です、こちらが掛ではまずいということでした。紙掛にいて、一年ばかりたってからでしたか、紙パルプ課になったんです。

問 やはり相手は国内の製紙会社だったのでしょうか。

答 ええ、主として紙は王子製紙の輸出を一手でやっておりました。パルプは輸入品と国産品で、国産品では、王子、塩水港パルプ、国策パルプなどのものを扱っておりました。輸入品はアメリカやスウェーデンなど北欧から輸入しておりました。当時、統制が厳しくなりました、輸入が勝手にできなくなりまして、輸入商社で組合をつくりまして割り当て制にしておりました。

問 三井本社が戦争中に改組しまして、三井本社が三井物産へ合併される形になっておりました、非常にかわった形なのですが……。

答 最初人事の異動がありましたが、大いして我々は影響を蒙りませんでした。

問 そうしますと、会社のトップとか形態が変わりますが、実際のお仕事をなさっている方は……。

答 ええ変わりませんでした。トップの方だけです。下の方は変わりませんでした。

IV 戦争末期と敗戦直後

問 戦争中また物産と本社が一緒であると具合がわるいということで、昭和19年に分離するわけですが、このあたりのことは、やはり組織のことだけで、実際働いている方にはさして影響は……。

答 ええ、影響ありませんでした。戦争が激しくなると、紙パルプを担当しておりますと、大体仕事は軍に協力するような仕事ばかり多くなりまして、私も最後に紙パルプ課長になりました。軍が北支や仏印（インドシナ三国）に進出しまして、宣伝用のビラをつくるために、新聞巻き取り紙を多量に輸送しました。

問 印刷は現地で……。

答 ええ、印刷は現地でやっておりました。新聞の巻き取紙というのは大変大きなもので、4本で1トンくらいでしょうか。それを輸送するわけです。初めはちゃんとした船で送ってやるのですが、だんだん魚雷でやられるようになりまして、しまいには本造船に5～6本積んで出しました。最後には仕方がないから、流そうかということになり、新潟辺から船を出すと潮流の関係で北朝鮮に着くということでした。実行はしませんでした、そこまで考えたことがありました。終戦になりまして、調べてみたら、数ヶ月前に木造船に積んで大阪港から出したものが、瀬戸内海をウロウロしていたという状態でした。最後は非常に苦しかったです。

問 紙風船（爆弾）をアメリカまで飛ばそうというような話もありましたね。

答 日劇シアターの中が全部紙風船工場になりました。あれは和紙を使うのです。実際飛ばしたのでしょうか。偏西風の関係で北アメリカへ落ちるということで、皆本気になって作っておりました。1、2発落ちたようですが、実際の効果はありませんでした。また末期になると、軍がアメリカの情報ならなんでも集めたいということで、私がニューヨークにいたものですから、旅行案内書のようなものまで出して呉れとってきてきました。あんなものまで出して読まなくちゃならんほど頼りなかつたんですね。

問 敗戦のころの話も承りたいのですが。三井物産も完全解体させられましたし……

答 敗戦の時分になると仕事が少なくなってきましたので、各部で新しいことを考えようじゃないかということになりまして、私は紙パルプを担当していたものですから、紙関係の仕事をやろうというので、紙器をつくる工場を作ろうということになりました。それを私が提案しまして、原料の方は王子製紙だとか国策パルプなどと取引があって、心配なだろうと考えたわけです。この提案が受入れられ、実行することになりました。ちょうどその頃三井物産の紙パルプに出入していた紙器業者で、^{やまが}弥栄製作所というのが東京の幡ヶ谷にあったのですが、それが爆弾でやられて、焼けてしまっていたのを買いました。当時私の上役の物資部副部長と正金銀行（今の東京銀行）から1人来てくれまして、それで作ったのです。最初匿名組合でいこうということで、匿名組合東京紙器製作所というのをつくりました。当時は終戦後のことで材料のない時でしたが、福島の中島飛行機の疎開工場がありまして、それを買って解体して持ってきました、幡ヶ谷に工場をつくりました。屋根を葺こうとおもってもブリキ板がないわけです。物産の金物部へ行きまして、特別に出してもらいました。普通より厚い板を出してくれました。それで仕事を始めました。

問 その頃は輸送も大変だったでしょうね。

答 ええ、大変でした。列車ですから。そして会社ができ上りました時に、例の財閥解体になったのです。その時はもう人を雇っておりましたから、工員が60〜70人おりましたか、それで仕方がありませんので、続けていこうということになりまして、中小企業を始めたわけです。

問 たまたま紙器のことをはじめて、それが解体前だったので、うまくつながったわけですね。

答 そうなんです。

問 三井物産解体前に敗戦後のものがない時に、津下さんと同じようなケースはございませんか。

答 聞きませんでしたね。例の水上市君は第一物産をつくりまして、私がパルプのことをやっておりましたので、水上市君が来ないかという話もありましたが、当時私はもう人を使っておりましたし、いまさら捨てていくわけにもいかないというわけで続けました。ご承知のように物産解体により260余りの会社が設立されました。

問 光学機械にもご関係になっておられますが……。

答 国策パルプ社長の水野成夫さんと親しくしてもらっておりました。その水野さんがセメント袋をつくる大手の千代田紙業という会社をやっておられたのですが、そこへいってダンボールの箱もやりませんかと話したら、一緒にやりましょうということになりまして、合併したんです。そこで新鋭設備の工場を作ろうということになり、私がアメリカへ視察に出かけ、新工場を作ったのです。それから5年くらいたったとき、それとは全く別の話で、アメリカのベルアランドフォーラムという16ミリの写真会社が、日本に工場をつくり、東京都下青梅にある富岡光学というレンズ工場を買いました。それを是非面倒見てくれというので、千代田紙業の方は水野さんのご了解を得て、やめまして、富岡光学の方に行ったのです。そこには17年ばかりいましたかね。

問 大沢商会には、奥さんとお父さんとお付き合いの関係で役員になられているのでしょうか。

答 ええ、社外役員になっておりました。

問 以前三井物産におつとめになっておられて、会社をおつくりになったわけですが、そのような場合、つい意識しなくても、バックのあったものがバックがなくなる

ことで失敗される方もあると聞いておりますが……。

答 実は紙器工場をつくる提案をしたわけですが、物産はたいてい子会社をつくると、今でいうと窓際族、当時で参与といったのですかね、そういう人を出してやらせるのですが、それはまずいので、提案者自身が出かけて行ってやりますよ、と偉そうにいったわけです。それがほめられましてね。物産におりますと金の心配はありませんし、組織で動いていますが、自分で仕事やると金の心配から何からなにまで全部心配しなくちゃならないから、これは頭をすっかり切り換えませんと、できませんですよ。苦勞しました。当時まだ紙の統制時代ですから、原料を買うのも大変で、私は、何か間接的に問題がおきて、裁判所へ呼ばれたことがあります。闇取引とか統制違反とかで。私が紙パルプを出て、あとをゆずった若い連中が、物産解体後、かれらだけで三洋産業とかいう小さい商社をつくりまして、仕事をやりました。

問 そうして解体後いくつも分れたものは、大体第一物産中心に再結集しましたが、元にもどられたケースが多いですか。

答 いくつか残っておるようですが、大体元にもどったでしょう。

問 ゼネラル物産はそのままですね。

答 ええ、それと極東貿易もそうじゃないですか。壺町物産が三井物産を名のり、その後第一物産と合併して、現在の三井物産の基礎を作りました。組織の三菱、人の三井とよくいわれますが、三菱などは早くから各社が一緒になれたんですね。分れていても連絡はあったようで、三井物産は人の三井といわれるほどだから、みんな、おれが、おれがという自信もあって、合併が遅かったんじゃないんですか。

問 江戸英雄さんとお会いして、お話をうかがった時には、やはり三井は財閥のトップでしたから、ずいぶん右翼からも狙われましたし、左翼からも攻撃うけましたし、三井家の方々も威張っていたし、敗戦後財閥復活の方に向うのを嫌がった幹部も多かったと聞きました。江戸さんや小山五郎さんは再結集派のようですね。東レの社長や何人かは今更という感じもっていたようです。お手元の質問表には、現地法人と支店の間にはどんなちがいがあったのかについて書いてありますが……。

答 少し分りませんが、税金関係があるんじゃないでしょうか。

問 三井物産におつとめになられまして、その経験は、いまお考えになられましていかがなものでしょうか。

答 物産での経験は大変役立ちました。最初勘定掛に配属されて、簿記、そろばんな

ど徹底的にたたき込まれましたのですが、物産の新入社員訓練は非常にシステムティックで立派なものでした。また最初勘定掛に入ったことで、会社自体のシステムをつかむ上で非常に役立ちました。

しかし何といっても物産に入って得たことは、国際感覚が身についたことです。外国に滞在して外国人と広く交ることにより、また世界を股にかけて取引することによって、世界の経済面ばかりでなく、その他の種々の問題に関心が深くなったことだと思います。

安岡 貴重なお話をどうもありがとうございました。

(以上)